

「つくる」と「みる」の往還に基づく美術鑑賞教育の可能性(1)

大阪芸術大学 大学院 嘱託助手 出村谷幸子

本研究は、現代美術を対象とした美術鑑賞教育の在り方を再検討し、「つくる」と「みる」という人間の根源的行為の往還に基づく鑑賞の枠組みを理論的・実践的に探究することを目的とする。特に、学校教育において現代美術をどのように位置づけ、鑑賞を学習として成立させることが可能かという課題意識のもと、従来の知識伝達型・評価受容型の鑑賞指導とは異なる鑑賞教育の可能性を検討した。

従来の美術鑑賞教育は、作品の様式理解や作家情報、歴史的背景の把握を重視する傾向が強く、鑑賞者自身が作品とどのような関係を結び、意味や価値を生成していくのかという点については、十分に理論化されてこなかった。その結果、鑑賞が「正解に近づくための行為」や「感想を言語化する訓練」として形式化され、鑑賞者の主体的関与が阻害される場面も少なくないのではないかと考える。本研究では、鑑賞を固定された価値を受け取る受動的行為としてではなく、鑑賞者自身が意味を「つくり出す」創造的行為として捉え直す立場をとる。

理論的枠組みとして、本研究は制作行為と鑑賞行為を対立的に分離するのではなく、両者が本質的に連続した営みである点に着目する。作家が制作過程において絶えず「みる」行為を伴っているように、鑑賞者もまた、見ることを通して自身の経験や感情、思考を作品に重ね合わせ、新たな意味を生成している。このような「つくる」と「みる」の往還構造を、鑑賞教育の中核概念として位置づけ、その妥当性を検証することが本研究の基盤である。

実践的検討として、筆者自身が日本各地の現代美術を扱う美術館および芸術祭を訪れ、作品と直接向き合う体験的鑑賞を重ねた。具体的には、下瀬美術館、青森県立美術館、十和田市現代美術館、国立新美術館に加え、瀬戸内国際芸術祭を重要な調査対象とした。これらの視察では、展示空間や建築と作品との関係性、鑑賞者の振る舞いや対話の様子を観察し、鑑賞体験がどのように成立しているのかを多角的に検討した。

とりわけ瀬戸内国際芸術祭の視察は、現代美術が地域社会や生活空間と交差することで、鑑賞経験をいかに拡張しうるかを考察する上で不可欠であった。瀬戸内の島々におけるアートプロジェクトでは、作品が港や住宅地、廃校、田畑、山道などに点在し、鑑賞者は船やバス、徒歩による移動を通じて作品と出会う。移動や待ち時間、天候、身体的疲労といった要素も含めた総体的な経験が鑑賞の一部となり、作品理解は身体的・感覚的次元と不可分なものとして立ち上がる。

直島新美術館では、アジア地域の作家による作品群

が展示され、社会的・政治的文脈を内包しつつも、鑑賞者に思考の余白を開く表現が多く見られた。これらの作品に対峙する鑑賞体験は、現代美術が決して一部の専門家のためのものではなく、鑑賞者が自ら考え、対話する契機を提供しうることを示していると感じる。

本研究の背景には、筆者自身が美術教育の現場において、鑑賞指導がしばしば困難を伴う実践として受け止められている現状への問題意識がある。特に、「何を感じたかを自由に言わせること」が鑑賞教育であると短絡的に理解される一方で、その発言がどのように作品と関係づけられ、意味生成へと発展しうるのかについては、十分な理論的裏付けが与えられてこなかった。この状況は、鑑賞を「なんでもありの主観表明」に矮小化する危険性を孕んでいる。

本論文では、こうした問題を踏まえ、鑑賞とは単なる感情の吐露ではなく、「作品という他者」との関係の中で自己の経験や思考を組み替えていく過程であると位置づけた。ここで重要となるのが、自然を眺めて感動する行為と、美術作品を鑑賞する行為との違いである。自然がそれ自体として完結した存在であるのに対し、美術作品は、制作者の意図や問い、素材の選択や形式の決断を内包した「表現された対象」であり、鑑賞者はそれを読み取り、応答することを求められる。本研究では、この点を鑑賞教育の理論的基盤として再確認している。

瀬戸内国際芸術祭で目にした鑑賞者の姿は、こうした理論的考察を実感として裏づけるものであった。島々を巡る中で、多くの人々が作品の前で立ち止まり、互いに言葉を交わし、ときに戸惑いながらも思考を共有している様子が見られた。そこには、作品の意味を即座に理解しようとする態度ではなく、「わからなさ」を含んだまま考え続けようとする開かれた鑑賞の姿勢があった。この経験は、鑑賞教育が目指しうる方向性として、鑑賞者同士が関係を結びながら思考を深めていく場の重要性を示唆している。

本研究は、今年度に明確な結論を導くことを目的とするものではない。むしろ、鑑賞の現場に身を置き、作品と対峙する体験を通じて生じた問いや手応えを蓄積し、鑑賞教育の再定義に向けた基盤を整える試みである。今後も理論的検討と実践的鑑賞を往還させながら、「見ること」を創造的行為として位置づける鑑賞教育の具体的な可能性を探究していく予定である。本研究は、現代美術と教育を架橋する実践的研究として、美術鑑賞教育に新たな視座を提供することを目指すものである。